

香取遺産

Vol.98

圓生涯学習課

☎(50)1224

徳星寺とくしやうじ本堂と十六羅漢像
密教道場の
構造風格を残す本堂



▲徳星寺本堂



▲十六羅漢像

富光山大乘聖院徳星寺は小見字大屋敷に所在する天台宗の寺院です。創建は奈良時代中期の天平9年(737)、現在の田部字玄道に、僧行基により開基されたと伝わります。後に小見富光(現在の吉野平)に移転、更に南北朝時代の貞治年中(1362、1367)に今の小見城跡に移りました。

本堂は、江戸時代中期の元禄8年(1695)の改築で、間口約20メートル、奥行約18メートルの草葺屋根であったものを昭和36年亜鉛葺に替え、奥行も約13メートルに縮小されました。今の向拝は明治13年に新規増築したもので、竜・獅子頭・松に鳥の彫刻があります。堂内の外陣は全部畳で、密教道場のため外部からのぞけないように、周囲の障壁を高くし、内外陣とも部屋ごとに障子で遮断する構造となっています。

また、同寺の重宝十六羅漢像は、中国の絵師周丹が描いた古画16幅で、江戸期元禄5年(1692)に狩野永真が、徳星寺に滞在中、次のような鑑定書を記しています。

「十六羅漢の図十六幅は周丹士筆に疑う物無きなり申(元禄五年)七月十八日、法眼永真印」

徳星寺は昭和53年12月、十六羅漢像は昭和42年12月にそれぞれ市指定文化財となっています(十六羅漢像は一般公開されていません)。



▲十六羅漢像全幅収納状況